

総合型選抜 2024 年度過去問題 救急救命学科

次の文（資料Ⅰ、資料Ⅱの新聞記事）を読み、あとの問いに答えなさい。

資料Ⅰ（「産経新聞」2022 年 10 月 9 日・朝刊）

ツイッターに投稿されたわずか 9 秒の動画。「ミニトマトカッター」という簡単な器具を使って、ブドウ一粒を 4 等分するだけの内容だ。「手軽にキレイに切れます。包丁、まな板不要なので、洗い物は少なく済みます」。そうメッセージが添えてある。

発信したのは大阪大大学院特任研究員の A さん(42)。一見何の変哲もない便利グッズの紹介動画が、再生回数 6 万回を超えるトピックとなったのには、理由がある。

そのころツイッター上では、幼い子供が大粒のブドウをほおぼる画像が「かわいい」と話題だった。

もともと、口が小さく、咀嚼する力の弱い幼児は喉に食べ物を詰まらせる危険がある。実際、東京の幼稚園では 4 歳の男児が給食のブドウを食べて窒息死する事故も起きていた。

ブドウやミニトマト、ウズラの卵など球状の食材は小さく切って与えるのが望ましい。だが日々家事に追われながら、このひと手間は案外負担だ。ほおぼる画像をアップした人が、楽しみながら懸命に子育てをしていることも分かる。

責める意図はない。そう受け取られると、言葉が届かなくなる。押しつけがましくならず注意喚起したい。そんな思慮の先に、グッズ紹介風の冒頭の動画がある。

伝えたい世代に、心に響く形で。痛みを知る A さんの啓発の言葉は、自然と優しさを帯びる。

「行ってらっしゃい」平成 24 年 4 月 21 日、土曜日の午後 2 時。休日の日課だったジョギングに出かける B さん＝当時(34)＝に A さんはそう声をかけた。5 歳だった長男を B さんが水泳教室に連れて行くまで、まだ 2 時間あった。

だが、その時間になっても B さんは戻らない。携帯電話にかけると家の中で着信音が鳴った。胸騒ぎがして地元消防の電話番号を押した。

「身長 175 センチで 80 キロくらいの 30 代の男性が運ばれていませんか」

「ちょっと待ってください」

何度かの転送を経て、行き着いた電話の相手方がこう告げた。「運ばれていますけど、もうお亡くなりになっていますね」

《21 日午後 2 時 10 分ごろ、大阪府茨木市西河原の安威川で「人が溺れている」と通行人の女性から 119 番があった。大阪府警茨木署などによると、同市庄の会社員、B さん(34)と同市立中学 2 年の男子生徒(13)が病院に搬送されたが、B さんは死亡が確認され、生徒は意識不明の重体。B さんは溺れた生徒らを助けようと川に飛び込んだという》(24 年 4 月 22 日付産経新聞朝刊)

身元を確認してほしい、と警察官が写真を持って自宅に来た。「絶対見たくない。嫌です」「でも、見てもらわないと・・・」

写っていたのは、水中から引き揚げられたばかりの口を開けた苦しそうな顔。間違いなく夫だった。遺体を見に行かねばならない。長男とまだ 2 歳の長女に服を着せ、長男に言った。「お父さん、死んだかもしれへん」

B さんは大手電機メーカーの技術者だった。同期入社だった A さんの方から何度もアプローチして結婚したのだという。A さんはその後退社し、事故当時は私立学校で国語の教師をしていた。

理系で頭脳明晰だった B さんは「すべてを数字で考える人」だった。物を買うにも収納場所の寸法から逆算するようなタイプ。感情に流されることは決してない。自分とは正反対の性格にひかれた。

事故直後の報道はそんな B さんの人柄にも触れている。産経新聞は、「危険顧みず飛び込む」という見出しを取り、知人の談話として「B さんなら他人の子供であっても迷わず飛び込むだろう」と伝えている。

目撃者の話によると、B さんは小中学生 3 人が溺れているのに気づくと、真っ先に飛び込み、後に続いた他の通行人とともに、次々と子供たちを救い出したという。

A さんが知る冷静沈着な夫とはどうしても結びつかなかった。すべて別人のことが書かれているように思えた。「新聞にはヒーローが載っていた。私の知っている人ではない」

特段、子煩悩でもない。子育てを手伝ってくれなかったときの、腹立たしい記憶すらある。めっちゃ普通のサラリーマン。それが A さんが心から愛した、等身大の夫の姿だ。

あの日から「私の半分は死んだ」。さっき送り出した人が、もう帰らない。しかも自分から救助に行って……。なんだそれ？

驚くほどの喪失感。それでも勤務先の株価は変わらず、テレビでは吉本新喜劇が流れる。そんな現実には呆然とし、美化された夫の記事を、ますます冷めた目で眺めた。

A さんのもう半分、子供のために生きると決めたものの、事故のことが頭を離れなかった。

浅く見える現場の安威川は、実は最大 4 メートルもの深みがあったと後から知った。そんな危険な場所なのに注意書きすらない。溺れた子供たちは、大人の監督者なしで遊んでいた。

事故には複合的な要因が絡んでいる。たどればたどるほど、芋づる式に派生していく。「事故について学びたい」。漠然としたテーマながら、確かな感情に突き動かされ、大阪大大学院の門をたたいた。最初の 1 年間は仕事も続けながら、子育てと学業をこなし、子連れで講義を受講した。3 年後修士課程を修了した。

果たして、人助けは美德なのか。見過ごせばトラウマになるかもしれない。だから勇気を振り絞るのが正しいのか。

長男が小学校高学年になったとき、こんなことを言われた。「あのとき俺がもっと『ゲームしよ』って言ってたら、お父さん走りに行かんかったんちゃうか」

B さんがジョギングに出る直前、長男は父をカードゲームに誘った。でも父は「後でな」と行ってしまったのだという。

初めて聞く話に A さんは狼狽した。「この子が自分を責めるのは、絶対違う」。こみ上げる涙をこらえ「あんたが何を言おうときっと行ってたわ」と作り笑いで否定した。

残された家族がどれほどつらいか。各地で講演を頼まれるたび、A さんは「助けに行ったらあかん」と言葉に力を込める。そこに至るまでに防げなかったのなら、もう救命のプロの到着を待つほかないのだ。

死亡するほんの直前の、B さんの目撃談がある。

川の中でもがく子供たちを見て、B さんはこう声をかけた。

「おまえら、溺れてるんか遊んでるんか、どっちや？」

そして水の中に飛び込んだのだ。いかにも理詰めで考える夫らしい一。

子供が事故に遭う因果は単線的ではない。A さんによれば、子供自身の性格、家庭の経済的・時間的余裕、親の子育て観など、さまざまな要因で個人差が生じる。

たとえば子供を自転車に乗せるとき、ヘルメットを購入できる親とそうでない親がいる。経済状態にかかわらず「不要」と考える家庭もある。A さんの研究テーマはそうした生活環境に左右され

ず、子供たちの安全が確保される社会をいかに作るかだ。

どれほど訴えても、人命救助に向かった人の二次被害はなくなる。むなしさを覚えることもある。それでも「私たちのような思いをする家族をつくらない」と研究を続ける。

人助けではなく、命を守り、育てるために。

(出典：「子供の事故「不慮」で終わらせない」産経新聞 2022 年 10 月 9 日 8:00)

資料Ⅱ（「産経新聞」2022 年 10 月 9 日・朝刊）

令和 2 年の子供の主な死因

	第 1 位	第 2 位	第 3 位	第 4 位	第 5 位
0 歳	先天奇形、変形及び染色体異常	周産期に特異的な呼吸障害等	乳幼児突然死症候群	胎児及び新生児の出血性障害等	不慮の事故
1～4 歳	先天奇形、変形及び染色体異常	悪性新生物	不慮の事故	心疾患	インフルエンザ
5～9 歳	悪性新生物	不慮の事故	先天奇形、変形及び染色体異常	心疾患	インフルエンザ
10～14 歳	自殺	悪性新生物	不慮の事故	心疾患	先天奇形、変形及び染色体異常

※厚生労働省の人口動態統計を基に作成

(出典：「子供の事故「不慮」で終わらせない」産経新聞 2022 年 10 月 9 日 8:00)

問 1 溺れた子供を助けようとして亡くなったご主人を Aさんは「ヒーローじゃない」と思った。そして子供の事故予防研究者の道を選んだ。どのような思いからであったのか資料Ⅰの記事から読み取り、200 字以内でまとめなさい（字数には句読点を含む）。

問 2 Aさんの「助けに行ったらあかん」（資料Ⅰ文中下線部）の言葉に込めた『不慮の事故』に対する考えを資料Ⅰの記事から読み取り、150 字以内でまとめなさい（字数には句読点を含む）。

問 3 あなたは消防職員として『子供の不慮の事故』について地域の方々への講演を依頼された。資料Ⅱは令和 2 年における子供の年齢別死亡原因である。いずれの年齢でも『不慮の事故』が上位であり、とりわけ 0 歳であっても第 5 位にあげられている。そして『子供の不慮の事故』の主たる内容は、交通事故、窒息、転落、溺水である。これらのことから具体的にはどのような事故が起こっているのかを考察し、資料Ⅰも参考に、あなたの講演要旨を 450 字以内でまとめなさい（字数には句読点を含む）。